

平成18年度学術創成研究費 事後評価結果

研究課題名	生物新機能と創薬をめざす生体内分子科学	研究代表者名	鈴木 正昭
-------	---------------------	--------	-------

1 研究計画、目的の達成度について

当初の研究計画、目的に照らし、採択時以降の関連分野の学術動向を踏まえた上で、その達成の度合いはどうか。

- ア () 予定以上に達成した
- イ (×) 概ね予定どおり達成した
- ウ () 一部不十分である
- エ () 達成していない

意見：
分子プローブ開発を共通の理念として、有機化学者を中心に in vivo 系研究者および装置開発産業との連携により多くの重要な発見と新しい PET トレーサーの創出に成功した。

2 当該学問分野及び関連学問分野への貢献度について

当該学問分野及び関連学問分野における研究の発展に関し、貢献の度合いはどうか。

- ア (×) 十分に貢献できた
- イ () 概ね貢献できた
- ウ () 一部貢献できた
- エ () 貢献できていない

意見：
PGI₂受容体のPET実現を軸として、関連学問分野の研究を内包しつつ、それぞれの領域で多くの成果を生み出した貢献度は高い。

3 研究成果について

(1) 学術創成研究費の趣旨及び当初の研究計画、目的に照らし、学術創成研究費としての意義ある成果をあげたか。(又はあげつつあるか。)

- ア () 非常に高く評価できる
- イ (×) 概ね高く評価できる
- ウ () 一部高く評価できる
- エ () 高く評価できない

意見：
22 - 23 名の研究者により5年間で約10億円の研究費を費やし、300あまりの分子プローブをつくり、約900編の論文を発表し、学会等への発表は150件以上におよんだ成果は、意義のあることと判断される。

(2) 研究成果の普及性、波及性はどうか。また、研究成果の積極的な公表に努めているか。

- ア () 非常に高く評価できる
- イ (×) 概ね高く評価できる
- ウ () 一部高く評価できる
- エ () 高く評価できない

意見：
 研究成果は、国内外で積極的に公表され、それぞれ高い評価を得たと思われる。本成果は新しいプロジェクト(2005-2009年度)を誕生させるとともに「日本ケミカルバイオロジー研究会」や「分子イメージング学会」発足につながったことも特筆に値する。

4 研究課題の総合的な評価

該当欄		評価結果
	A +	期待以上の進展があった
×	A	期待どおり進展した
	B	期待したほどではなかったが、一応の進展があった
	C	十分な進展があったとは言い難い

総合的な評価意見：

生体内情報伝達機構を対象として分子プローブを個体レベルにまで展開し、脳機能、がん、循環器系疾患を克服しようとするものであった。5年間で質・量共に期待どおりの分子プローブ創製や新技術が達成されたのみならず、生物学・医学領域の研究者と先導的な組織づくりや情報発信が図られたことは意義深いことである。しかし、“本研究は「ポストゲノム」時代の創薬研究に「新パラダイム」の提案と主導的指針を与える”との頭初の理念が、研究終了報告書では、これに関しては記載がないのは残念である。